

第8章 探検的行動がもつ意味

探検的行動とは何か

遊び——探検的行動の起源

人類は、探検的行動に非常に高い評価が与えてきた。とはいえ、それはなぜなのであろうか。その理由を検討する前に、探検的行動の起源を手短かに眺めておくことにしよう。生活の維持や向上とは無関係に、身のまわりの事実を知ろうとする行動は、人間以前の動物にも観察される。好奇心に基づくと思しき行動が、それに当たる。

類人猿のみならず、多くの鳥類にも、遊びとしか思われられない行動（たとえば、バーバー、2008年、第6章；ハワード、1980年、第5章；ローレンツ、1971年、第5章）がしばしば観察される。けがをして拾われたカケスを育てたナチュラリストのロバート・レスリーは、飼育状況下とはいえ、「カケスは、目がさめている時間のなんと約八二パーセントを遊んでいる」（レスリー、1989年、72ページ）と述べているほどである。

これも前章でふれた通り、類人猿の場合には、人間に見られるような探索行動をすることも知られている（たとえば、サベージ＝ランバウ、ルーウィン、1997年、第7章）。とはいえ、ボノボ（ピグミー・チンパンジー）であっても、自らが事実を知ろうとしているという自覚は、少なくとも人間ほどはつきりもっているわけではないであろう。ましてや、その場合の、ことの重大性を認識しているとは思われぬ。

次に引用するのは、催眠研究にある意味で革命を起こしたことで有名なシオドア・バーバーが、鳥類の行動を扱った文献から、晩年の6年間を費やして拾い出した観察所見をまとめたものである。

鳥たちは、人間と同じように、遊ぶこともできれば、楽しむこともできる。その遊びには、簡単な娯楽的運動から、組織化された複雑なゲームに

いたるまで、さまざまなものがある。たくさんの種類の鳥が、棒や植物の葉、鳥の羽、松ぼっくりその他、数多くのものを使って遊んだり、小さなものを空中から落とし、地面に落ちるまでの間につかみとるという動作をくりかえし演じたり、流れの速い潮に乗ったり、明らかに楽しみだけのために、雪の吹きだまりを足から滑り降り、歩いて登り返して、もう一度滑り降りたりするところなどが、信頼のおける研究者によって観察されている。“追いかけっこ”や“大将ごっこ〔大将役のすることをすべてまねる遊び〕”、獲物を使った“ネコとネズミごっこ”なども、ごくふつうに見られる遊びだ。実際に、細心の注意を払って観察された記録によれば、多くの種類の鳥たちが、一日のうちの驚くほどの時間を、まるでそれが娯楽でもあるかのように、同種の鳥や異種の鳥との“追いかけっこ”や、日光浴、飛翔、歌唱に費やしている。(バーバー、2008年、72-73ページ)

鳥類の場合は、そのうえに、囀りや歌唱という音楽的遊びが加わる。鳥たちのために開放した自宅や庭園で、鳴禽たちと“友人”として接しながら、もてる時間をすべて投入して、鳥の行動や囀りを長年にわたって日常的に観察、研究したレン・ハワードという英国の女性音楽学者によると、鳥の囀りは、技巧という点では人間の作曲家に匹敵するほどすぐれているという(Howard, 1952, chap. 10)。歩く民俗学者と呼ばれた宮本常一の主著に、明治以前の村では歌唱能力の優れた男女は高く評価されたという聞き書きがある(宮本、1984年、32-34ページ)が、それと通底するものなのかどうかは不明にしても、鳥の場合も囀りの巧みな個体は、やはり高く評価されるようである。

こうした遊び的行動は、生物のもつ主体性を端的に示す特性である。現在の進化論の定説たるネオ・ダーウィニズムでは、それも、自然選択によって出現した行動様式と考えざるをえない。自然選択という機械的な選別過程を通じて、こうした明確な自発的行動が生まれ出たとすれば、それは、ロボットが、人間のプログラムを離れて自発性を獲得するほどの、このうえなく考えにくい現象のように思われる。いずれにせよ、ここではつきりするのは、純粋に好奇心に基づくように見える行動は、人間以前にも、また系統がかけ離れた鳥類などにも既に存在するということである。

探検的行動の意味

生活には直接役立つたないように見える、この種の行動は、どのような役割を担っているのであろうか。ネオ・ダーウィニズムの陣営から見ても、これらは、その行動が“生存価”をもつかどうかという点で、どうしても避けて通れない問題のはずである。ネオ・ダーウィニズムの枠内では、これらについても、結局は生存に役立つはずだとして説明する以外にない。そのため、たとえば、環境や生活により適した行動の獲得という大前提に沿った“解釈”を、むりやり見つけ出すことになる。しかし、その解釈が正しいことは、どうすれば証明できるのであろうか。

人間は、かなり以前から、極地や砂漠の中心部や高山などのごく一部を除けば、地球上のあらゆる地域に居住している。今では人が住んでいない尾根筋などからも、人が暮らしていた集落の遺構が発見されるほどである。人類が発祥したのが限局されたわずかな地域であるのなら、人類はそこから、世界各地へと広がって行ったことになる。そうした拡散の時代には、探検的行動が、そのまま生活圏を広げるのに役立っていたはずである。酷熱の砂漠地帯から酷寒の北極周辺に至るまで、また海面下から標高4千メートルを超える高地に至るまで、衣食住を工夫することで居住可能な地域ならどこへでも、追われてやむをえざる結果としてではなく、積極的に入って行ったのであろう。

では、動植物の場合はどうなのであろうか。結果から推定する限り、多種多様な動植物も、やはり酷熱の砂漠地帯から酷寒の北極周辺に至るまで、さらには深さ8千メートルの深海から高山に至るまで、それぞれの環境に合わせて身体を“加工”することで居住可能な地域ならどこへでも、他種に追われてやむをえずということではなく、「前のものの開発しておらないようなところに目をつけて」（今西、1978年、44-45ページ）、やはり積極的に入って行ったのであろう。

このように、意識的か否かを別にして、人間でも動植物でも、探索的な行動が、地に充つるうえできわめて重要な役割を演じているわけである。こうした主体性こそが、動植物や人間の、あるいは生命の本質的な属性なのであろう。

同じ探索行動であっても、以上のように実益的側面や気晴らし的側面をもつ、明らかに生活派的な行動と、喜びを生み出し人格の進歩につながる、より創造的な芸術派的行動とがあることになるが、進化的に見ると、起源の古い前者から、より人間的な後者が浮上したと考えざるをえない。このように分類する

と、スリルを味わおうとする程度の冒険的行為は、探検に似て非なるもので、生活的、娯乐的な範疇に入ることがわかる。では、生存に密着した探索的行動や娯乐的行動とは異質の、芸術派的な、いわば純粋探検行動の役割は、どこにあるのであろうか。

動物については言うまでもないが、ヒトの場合でも、自らの行動の真の理由が意識の上でわかっているとは限らない。それどころか、わかったつもりであっても、実際には、意識の上で理由がわからない行動のほうが、はるかに多いのではなからうか。そうすると、それぞれの行動のいわば真意を探り出すのであれば、単に推定を重ねるのではなく、客観的な指標を可能な限り使って、厳密に検討して行くしかないということである。

純粋探検行動が評価される理由

ところで、私が開発した、幸福否定という概念を中核に据えた心理療法では、心理的原因を探る際に、単なる推定ではなく、反応と呼ばれる客観的指標を利用する。前章で説明しておいたように、反応は、幸福感に対する心理的抵抗によって生ずるもので、あくび、眠気、心身の変化という3種類からなり、方法さえまちがえなければ誰にでも起こる。そこで、抵抗という指標に着目して、純粋探検行動が高く評価される理由を手短かに検討してみることにしよう。

ほとんどの方は経験的にわかるであろうが、前章でもふれておいたように、娯乐的な行動に抵抗のある者はほとんどいない。むしろ、その誘惑に抗することのほうがはるかに難しい。それに対して、自分が本当にしたいと思っている行動に際しては、私の言う幸福否定に起因する抵抗が、必ずと言ってよいほど起こる。そのことは、ゲームなどの娯乐的行動を長時間にわたって続けてすら眠気や疲れが起こらない者でも、自分のためになるはずの勉強や仕事をしようとすると、すぐにだるくなったり眠くなったりなど、さまざまな心身症状が出現するという、対比的現象を考えるとわかりやすいであろう。

その場合、眠くなったりあくびが出たりしても、それは退屈や倦怠のためではない。ほとんどの場合、娯乐的行動を始めると、あるいはそれ以前に勉強や仕事を中断するだけで、それらの症状が一瞬のうちに消えるからである。もちろん、勉強や学業は、純粋探検行動ではないが、そうした行動に付随して起こる反応は、純粋探検行動を含めた創造活動に付随して起こる苦痛と、同質のものと考えてよい(笠原, 2004年b, 第7章)。

人間が希求する行動の究極的形態とも言える純粋探検行動に対しては、多くの生活派科学者から浴びせられる没論理的批判という形の抵抗とは別に、先述のように自分の内心から生まれ出る抵抗も存在する。批判する側ばかりでなく、純粋探検行動をする側にも、こうした抵抗が発生するのである。この問題は、非常に興味深いばかりでなく、パイオニア的な探検的行動一般がきわめて高く評価される理由を解明するうえで、非常に重要な手がかりにもなる。幸福否定の観点に立てば、そうした抵抗が起こるのは、それが、当事者の人格を成長させることから、きわめて大きな喜びをもたらすためであることになる。

これまで検討してきた、特にパイオニア的な純粋探検行動に共通して見られる特徴をまとめると、順不同であるが、次のようになる。

- 一部の高等動物にその萌芽が見られるものの、より人間的な行動特徴であること
- 生活派が実践することは原則としてないこと
- ほとんどの場合、意図するか否かは別として、必然的に各種の権威に対する反逆になること
- 高く評価される反面、時代を先駆けすぎると、規制や差別や弾圧の対象になること
- その評価は、科学的探究活動と地理的探検行動の双方でほぼ共通していること
- 原則として、行動者自身がことの重大性を意識の上で認識していないと成就されにくいこと
- 生活派研究者や世間一般の人たちからの抵抗ばかりでなく、多くの場合、行動者自身の内部からの強い抵抗にも直面せざるをえないこと
- 多くの場合、行動者自身に人格的成長や大きな幸福感をもたらすこと

以上の特徴を眺めてあらためてわかるのは、パイオニア的な純粋探検行動は、それが並外れた（つまり、それまでの常識を大きく外れた）ものであればあるほど、非難される度合いが強く、その期間も長くなるという特徴をもっていることである。ところが、場合によっては長大な、いわばその浄化期間を過ぎると、今度はその分だけ、まさに掌を返したように高く評価されるという特性も備えているのである。そのことは、歴史上、くり返し観察されてきた事実であり、あら

ためて具体例をあげるまでもない。このような観点から考えると、達成直後に世界中の先端的探検家たちに強いインパクトを与え、最大級の評価や賛辞がもたらされたエベレスト初登頂は、いつかは誰かによって必ず達成される種類のものであり、意外性はないため、一里塚とは言えようが、そのこと自体はそれほど大きな出来事ではないことがわかる。

むしろ、エベレストが登頂されたからこそ、真の探検家は、より創造的な本来の探検に向かうことが、心置きなくできるようになったとも言える。エベレスト初踏の意味は、まさにこの点にこそあるのではなかろうか。つまり、人類を、外界の探検から内界の探検へと本格的に向かわざるをえなくさせる決定的な契機になったという点で、人類史的に大きな意味があったということであり、人類が越えるべきひとつの大きなハードルであったにすぎず、真の目標ではなかったということである。したがって、人類史的に見て肝心なのは、物理的外界の探検ではなく、より創造的な内的探検のほうなのである。^{〔註1〕}その真偽は、科学的方法では検証できないが、このうえなく重要な問題のように思われる。

物理的外界の純粋探検行動が高く評価されるのは、それが実利的側面をもつ探検の延長線上にあるからではないか、という推定もできないわけではないが、内的な純粋探検行動のほうが、おそらくそれ以上に高く評価されるのである。そうであれば、その理由は、それとは違うところにあることになる。次に、この問題を別の角度から検討することにしたい。

新しい発見や着想に対する抵抗

科学の枠内で起こった、歴史的に見て最大級の革命と考えられているのは、古い順から地動説、進化論、現代物理学の諸理論であろう。地動説と進化論は、特にキリスト教世界で生きてきた西洋人から、このうえなく強い抵抗で迎えられたのである。これらの科学革命はいずれも、過去の人間の思い込みを根本から正す役割を果たしている。次に、この点を、抵抗という観点から考えてみ

〔註1〕 イタリアの登山家、ラインホルト・メスナーは、先鋭的登山という外的探検をしているわけがあるが、実際には、それを通じて内的探検を自覚的に実践している稀有な存在のように思われる。そのことは、他の登山家の著書とは完全に一線を画するメスナーの著書を一読すれば、容易にわかるであろう。他の登山家については、マーフィー、ホワイト著『スポーツと超能力』（1984年、日本教文社）に数多くの実例が紹介されているので、関心のある方は参照されたい。

ることにしよう。ただし、ここで言う抵抗には、通常の意味での抵抗も含まれており、幸福否定による抵抗だけを指すわけではない。

言うまでもないことであるが、旧来の常識に対しては、原則として誰であれ抵抗はない。それに対して、新しい発見や着想は、必然的に常識を覆すものなので、それに対しては、まず発見者自身が、続いてそれ以外の人たちが、時間差はあるがそろって抵抗することになる。そこで問題になるのは、この場合の抵抗の意味である。これが、通常の意味であれば、特に問題はない。なじみある常識が通用しなくなり、それとは根本的に異なる考えかたを受け入れなければならなくなる以上のものではないからである。したがって、その場合に問題になることと言えば、せいぜいのところ、それに慣れる必要があることくらいのものであろう。あるいは、旧来のパラダイムで研究生活を送ってきた科学者の場合には、それまでの業績が無になることへの不安や危機感に基づく通常の抵抗もあろうが、それは、まさに世代の交代によって解消される種類のものはずである。

しかし、それにしては、アメリカでの進化論に対する抵抗や、現代世界全体での超常現象に対する抵抗は強すぎる。前者については、同じキリスト教国でもアメリカだけがなぜ特殊なのかという側面からも、ある程度はこの本質に迫れるかもしれないが、ここでは、来たるべき（とはいえ、おそらくはかなり先のことになる）科学革命の担い手になるはずの超常現象に話を戻して、検討を続けることにする。超常現象の場合には、ほとんどの宗教の枠内ではごくふつうに起こる現象とされているにもかかわらず、この重大性がひとたび念頭に置かれると、たちどころに強い抵抗を引き起こすようになるのも奇妙である。^[註3]したがってこれは、通常の意味での抵抗ではなく、私の考える幸福否定に関係した抵抗に違いない。

[註2] 東洋では、地動説も進化論も、西洋人とは異なる受け止めかたをされ、文明国発の新しい科学知識を謹んで受け入れるという以上のものではなかった。そのことから、科学革命によるインパクトの強さは相対的なものであることがわかる。しかしながらそれは、キリスト教世界と非キリスト教世界の差によるのみならず、真理の探究をどこまで重視するかによる違いという側面も関係しているかもしれない。

[註3] ちなみに、芸術派の人々は、どうやら、この重大性すなわち現実の重みが実感としてわからないため、超常現象の存在を当然のように認めることが多いが、ひとたびこの重大性が実感できるようになると、非常に強い抵抗が起こるようになる。